

広島大学平和科学研究センター

## Newsletter

2005年



〒730-0053 広島市中区東千田町 1-1-89

tel: 082-542-6975 fax: 082-245-0585

email: heiwa@hiroshima-u.ac.jp

http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa

### 第55回パグウォッシュ年次大会の意義について

日本パグウォッシュ会議代表・東北大学理事 大西 仁

本年(2005年)7月に第55回パグウォッシュ年次大会が広島で開催される。これは、10年前に広島で開かれた第45回年次大会に次ぐ、日本で行われる2回目の年次大会となる。

今回のパグウォッシュ会議開催の主な意義として、次の3つを挙げることができよう。

1. 本年は、パグウォッシュ会議発足のきっかけとなった「ラッセル・アインシュタイン宣言」が出されて50年目にあたる。同宣言は、冷戦の最中の1955年に、核廃絶の実現なくしては人類の存続が危ないことを明らかにしたものであった。当時と比べ現在は、全面核戦争勃発の危険性は小さくなったとはいえ、核兵器が存在する限り、核兵器が使用される危険はなお存在し、いったん核兵器が使用されれば多大の人的被害は免れ得ない。また、核保有国には、新型の小型核兵器を開発し、核兵器を「使用可能な」兵器にしようとする動きも見られ、核兵器使用の危険はひとところよりもむしろ高まっている。

そこで今回の年次大会では、改めて核兵器を廃絶すべき論拠を明らかにすると共に、「ラッセル・アインシュタイン宣言」の精神に立ち返り、核兵器廃絶の必要性を「人類の一員として人類に向かって」訴えることが強く求められている。

2. 「ポスト・ポスト冷戦期」の現在においては、冷戦終結直後の「ポスト・冷戦期」と比べて、「民族紛争」や「テロ」の頻発に示されているように、国際緊張が高まっている。このような状況下において、国際社会、とりわけ中東地域や東アジア地域において、どのようにしたら、軍事力によらない国際社会の安全を実現できるかというのも、今回の年次大会の大きな課題になるだろう。

3. 今年、第二次大戦終結、広島・長崎の被爆から60周年目に当たる。近年、日本国内では、憲法改正論議がさかんになり、日本の核武装化を求める声も目立つようになった。そのよ

うな情勢にあって、今回の年次大会では、参加者が被爆者を含む市民と対話する機会が設けられ、県・市の平和への取り組みも紹介される。それによって、今後も日本が非核の姿勢を維持し、平和の実現のために、どのように国際社会と連帯すべきかの議論が深められることが期待される。

今回の年次大会では、広島大学が実質的な「開催校」として運営に協力する。同大学の平和科学研究センター創立 30 周年の記念事業の一つとして、年次大会終了後に、パグウォッシュ会議評議委員会議長マリー・ムラー教授（南アフリカ）による特別講演も行われ、年次大会の成果が紹介されることになっている。

## 2004 年度平和科学研究センター活動 シンポジウム

広島大学平和科学研究センターの第 29 回シンポジウムは、2004 年 12 月 2 日、「資源管理をめぐる紛争の予防と解決」のテーマで行われました。当日は内外の研究者、大学院生、一般市民の方々などの参加者がパネリストを囲んで活発な議論を展開しました。パネリストと報告内容は、以下の通りでした。

井上真(東京大学大学院農学生命科学研究科教授)「自然資源の『協治』は有効か? インドネシア・カリマンタン州の事例より」

鎌田真弓(名古屋商科大学総合経営学部教授)「ランド・マネジメント: 鉱山開発、環境保全と先住民族の権利」

村田俊一(関西学院大学総合政策学部教授)「国連システムの苦悩 資源管理をめぐる紛争: モロ民族解放戦線 MNLF (フィリピン、ミンダナオ島)との開発協力プロジェクトの変遷」

## 研究会

第 156 回(2004 年 7 月 16 日)

Harald Plachter, “Current Political Issues of Nature Protected Areas”

第 157 回(2005 年 1 月 28 日)

今岡良子「モンゴル遊牧民の自然資源活用 資源をめぐる紛争予防の観点から-」

第 158 回(2005 年 2 月 24 日)

György Szell, “Environmental Conflicts as a New Dimension of Peace Research”

## 出版物

・『広島平和科学』(第 26 号、2004 年)

所収論文:

山田浩「米口間戦略核削減と「備蓄」問題 - いわ

ゆる「モスコワ条約」(SORT)の意義を考える -」

小柏葉子「太平洋島嶼フォーラムの地域紛争への関与 - ソロモン諸島における平和構築から武力介入決定まで -」

柄谷利恵子「:「移民」と「難民」の境界: 作られなかった「移民」レジームの制度的起源」

Masatsugu MATSUO, *et al.*, “A Full-text English Database of Testimonies of Those Exposed to Radiation near the Semipalatinsk Nuclear Test Site, Kazakhstan”

池田正彦・松尾雅嗣「峠三吉東京資料: 峠資料電子化の文脈で」

平木隆之「遺伝子組換え作物をめぐる生命特許と農民特権 - シュマイザー・モンサント事件を中心に -」

Masaaki SATAKE, “Overseas Dependent Development or Alternative Development: Significance of Philippine Community-based Industries”

材木和雄「統合直後の南スラヴ人統一国家」

篠田英朗「国際平和活動における「法の支配」の確立: ボスニア = ヘルツェゴビナを事例にして」

・IPSHU English Research Report Series No.19, Hideaki Shinoda and Ho-won Jeong (eds), *Conflict and Human Security: A Search for New Approaches of Peace-building* (August 2004)

・IPSHU 研究報告シリーズ研究報告 No.32: 松尾雅嗣・池田正彦(編): 『峠三吉資料目録』(2004 年 10 月)

・IPSHU 研究報告シリーズ研究報告 No.33: 鹿野忠生・橋本金平: 『現代世界経済秩序の形成とアメリカ海軍の役割 世界史の全体構

図からみた「太平洋戦争」の歴史的意味とその教訓』(2004年11月)

## センター専任研究員の研究教育活動

### 松尾 雅嗣 (教授)

学術論文：・池田正彦・松尾雅嗣(編)『峠三吉被爆日記』(広島大学ひろしま平和科学コンソーシアム、2004年) 88頁。

・松尾雅嗣・池田正彦(編)『峠三吉資料目録』(広島大学平和科学研究センター研究報告 32、2004年) 167頁。

・川野徳幸・峠岡康幸・松尾雅嗣他6名)「セミパラチンスク核実験場近郊での核被害:被曝証言を通して」、『長崎医学会雑誌』、79号(原爆特集号) 2004年、48-52頁。

・Yoshiyuki Nakao, Akiyuki Jimura, and Masatsugu Matsuo, “A Project for a Comprehensive Collation of the Hengwrt and Ellesmere Manuscripts of *The Canterbury Tales*: The General Prologue,” Junsaku Nakamura et al (eds.) *English Corpora under Japanese Eyes*, (Amsterdam & New York: Rodopi, 2004), pp. 139-150.

・Masatsugu Matsuo and 5 others “A Full-text English Database of Testimonies of Those Exposed to Radiation near the Semipalatinsk Nuclear Test Site, Kazakhstan,” 『広島平和科学』、26号、2004年、75-99頁。

・池田正彦・松尾雅嗣「峠三吉東京資料:峠資料電子化の文脈で」、『広島平和科学』、26号、2004年、101-131頁。

教育：大学院国際協力研究科「平和学」、「世界秩序論演習」、「国際関係特論」(分担)。総合科学部「紛争解決論」、「戦争と平和に関する総合的考察」(分担)。医学部「医療国際協力論」(分担)。短期交換留学プログラム「人権と平和」(分担)。

研究費：平成15年度前期広島大学研究支援金「原爆文学を中心とした広島原爆資料の目録作成と電子化の研究(研究代表者)」

### 小柏 葉子 (助教授)

学術論文：・「太平洋島嶼フォーラムと東アジア」

関根政美・山本信人(編)『現代東アジアと日本 第4巻: 地域アジア』(慶應義塾大学出版会、2004年) 261-280頁。

・「太平洋島嶼フォーラムの地域紛争への関与 ソロモン諸島における平和構築から武力介入決定まで」、『広島平和科学』、26号、2004年、25-45頁。

学会報告：「オセアニアから見たアジア - 太平洋島嶼フォーラムの対アジア政策」、日本国際政治学会 2004年度研究大会トランスナショナルII分科会、淡路夢舞台国際会議場、2004年10月。

教育：大学院国際協力研究科「地域協力論」、「世界秩序論演習」、「国際関係特論」(分担)。総合科学部「地域協力政策論」、「戦争と平和に関する総合的考察」(分担)。中国・四国地区国立大学間共同授業「世界平和を考える」(分担)。

学会での活動：日本平和学会理事。

社会での活動：国連大学グローバル・セミナー島根セッション・プログラム委員、国立民族学博物館共同研究「オセアニア諸社会におけるエスニシティ」研究員。

### 篠田 英朗 (助教授)

学術論文：・「アメリカ・ユニラテラリズム - 国際刑事裁判所を題材にして - 」、押村高(編)『帝国アメリカのイメージ: 国際社会との広がるギャップ』(早稲田大学出版部、2004年) 254-277頁。

・「国際平和活動における『法の支配』の確立: ボスニア=ヘルツェゴビナを事例にして」、『広島平和科学』、26号、2004年、215-239頁。

・(with Ho-Won Jeong) “Introduction: Conflict, Human Security and Peace-building” in Hideaki Shinoda and Ho-Won Jeong (eds.), *IPSHU English Research Report Series No. 19: Conflict and Human Security: A Search for New Approaches of Peace-building*, August 2004, pp. 1-4.

・“The Concept of Human Security: Historical and Theoretical Implications” in Shinoda and Jeong (eds.), *IPSHU English Research Report Series No. 19*, pp. 5-22.

・“Operational Phases of Human Security Measures in and after Armed Conflict: How Can We Link Humanitarian Aid to Peace-building?” in Shinoda and Jeong (eds.), *IPSHU English Research Report Series No. 19*, pp. 23-44.

学会報告(学術講演): ・「国連平和活動と日本外交」、日本国際連合学会第6回研究大会、大阪大学中之島センター、2004年5月23日。

- ・「なぜ紛争(後)地域にシビリアンが必要なのか: 平和構築活動の重要性と危険性」、早稲田大学政治経済学部主催シンポジウム「紛争(後)地域の平和構築におけるシビリアンの貢献 - 奥大使追悼 - 」、早稲田大学、2004年6月23日。
  - ・「グローバルな力と紛争後社会の平和構築: アメリカ『帝国』の国際平和活動への関与の検討」、日本平和学会2004年度春季研究大会、北海道東海大学、2004年6月26日。
  - ・「平和構築の政治理論: 実践的課題と日本外交への提言」、2004年度日本政治学会、2004年10月2日、札幌大学。
  - ・「国際法秩序の重層的系譜: モンロー体制の歴史的再検討」、第263回東大国際法研究会、2005年1月29日。
  - ・“Towards the International Criminal Court as a Peacebuilding Institution,” 日本学術振興会「人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業: 平和構築とグローバル・ガバナンス」、2005年3月26日。
- その他: ・「人質事件で露呈した日本の国際平和協力の限界」、『論座』(2004年6月号) 36-47頁。
- ・「米国による紛争後の国家再建: 軍事力のジレンマと理念主義のジレンマ」、『現代思想』(2004年9月号) 188-200頁。
  - ・「米国だけの『全面戦争』: 共有可能な平和構築へ議論を」、毎日新聞2004年9月8日夕刊。
- 研究費: ・平成14-16年度科学研究費補助金若手研究(A)「平和活動による法の支配の確立 - 旧ユーゴスラビアでの諸活動を中心にして - 」(研究代表者)。
- ・平成14-16年度科学研究費補助金基盤研究B(1)「国際法基礎理論の再構築」(研究分担者)。

社会での活動: 平成16年度参議院国会議員政策担当秘書研修講師、広島市・広島平和文化センター「ヒロシマ・ピースフォーラム」講師、JICA 国際協力総合研修所セミナー「開発援助における平和構築支援の課題と限界」講師、学生模擬国連九州大会講師、朝日新聞社・広島市・広島平和文化センター主催国際平和シンポジウム「再び築こう核廃絶の流れを - 強めよ

う都市と市民の連携 - 」講師、環境・持続社会研究センター「ODA と貧困削減・平和構築」講師、JICA 国別研修「ボスニア・ヘルツェゴビナ平和のための教育ネットワーク構築」コースリーダー・講師、世界平和記念聖堂献堂50周年記念行事講師、広島県・JICA 中国国際センター「ひろしま国際平和フォーラム」講師、第26回国際学生シンポジウム講師、ピースおおさか「21世紀の平和を考えるセミナー」講師、JICA 技術協力専門家養成研修「平和構築」講師。

賞罰: 第3回広島大学長賞

## 2004年度研究プロジェクト

小柏葉子・助教授を研究代表者とする平成15年度前期「広島大学研究支援金」文・理ジョイントプロジェクト「資源管理をめぐる紛争の予防と解決に関する研究」(その他の研究メンバー: 松尾雅嗣、篠田英朗、中越信和(総合科学部)、熊谷元(国際協力研究科)の研究を引き続き行いました。研究成果は、2005年度に公表する予定です。

## センター来訪者(団体、外国人研究者)

2004年5月27~29日「Conflict and Human Security」研究メンバー一行

2004年8月11日 米国討論学会一行

2004年11月22日 Sylvia Lydia Gonzalez 博士  
2005年1月26日 Valer Obukov 学長(トムスク教育大学)

2005年2月24日 György Széll 博士(ドイツ・オズナブリュック大学)

## 出版物の予定

- ・『広島平和科学』(第27号、2005年)
- ・I P S H U研究報告シリーズ34 広島大学図書館編『平岡敬関係文書目録(韓国人・朝鮮人被爆者問題関係史料)』

## 訃報

栗野鳳・元平和科学研究センター長・顧問が、2004年4月18日に他界されました。

## 人事

元木恵理に代わり、2005年4月から高橋静子が新事務員として赴任しました。

篠田英朗助手が助教授に昇任しました。